

促成トマトで黄化葉巻病が平年より多く発生しています。 黄化病対策も併せて、コナジラミ類の防除を徹底しましょう！

トマト黄化葉巻病（写真1、2）は、タバココナジラミ（写真3）が媒介するウイルス病です。発病してからの治療はできないため、タバココナジラミの防除が重要です。

本年は、促成トマトにおいて黄化葉巻病が平年より多く発生しています。

また、別のウイルス病であり、タバココナジラミおよびオンシツコナジラミが媒介する黄化病（写真4）の発生も平年よりやや多い状況です（データ省略）。

これから気温が上昇してくると、コナジラミ類の増殖が早く、活動が活発になるため、両ウイルス病の発生が拡大するおそれがあるので、防除対策を徹底しましょう。

[現在の発生状況]

- ① 1月下旬現在、発病株率（本年値1.3%、平年値0.3%）、発生地点率（本年値44%、平年値9%）ともに平年より高い（表1）。
- ② 1月下旬現在、一部圃場においてタバココナジラミ成虫の発生を認めている（データ省略）。

表1 促成トマトにおける黄化葉巻病の発生状況（令和7年1月下旬調査）

発病株率（%）			発生地点率（%）		
本年値 ¹⁾	平年値 ²⁾	順位 ³⁾	本年値	平年値	順位
1.3	0.3	1-2	44	9	1-2

1) 県央1地点、県南5地点、県西3地点における調査結果。

2) 平年値：過去10年間のデータの平均値。

3) 順位：本年を含む過去11年間における本年値の順位を示す（1-2は1位から2位まで同じ数値であることを示す）。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。
- ② コナジラミ類の施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に0.4mm目合い以下の防虫ネットを設置する。なお、施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ③ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、コナジラミ類成虫を捕殺する。
- ④ コナジラミ類は多発生すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬剤が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。コナジラミ類の薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑥ 花粉交配用昆虫や天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。
- ⑦ 黄化葉巻病耐病性品種は、ウイルスに感染しても発病は抑制されるが、感染株は本病の伝染源になるため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。なお、黄化葉巻病耐病性品種でも、黄化病には感染するので注意する。
- ⑧ 雑草はコナジラミ類の生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。



写真1 黄化葉巻病の頂部の萎縮症状



写真2 黄化葉巻病の葉の退緑症状



写真3 タバココナジラミ成虫



写真4 黄化病の症状

表2 トマトのコナジラミ類防除に使用できる主な薬剤（令和7年1月15日現在）

薬剤名	希釈倍数 ¹⁾	使用時期	本剤の使用回数	有効成分名	同左毎の総使用回数	IRAC ²⁾ コード
アルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	ジノテフラン	5回以内 ³⁾	4A
ディアナSC	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	スピネトラム	2回以内	5
アニキ乳剤	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	レピメクチン	3回以内	6
コロマイト乳剤	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	ミルベメクチン	2回以内	
コルト顆粒水和剤	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	ピリフルキナゾン	3回以内	9B

1)使用方法「散布」の登録内容

2)殺虫剤抵抗性対策委員会（IRAC）により、殺虫剤の有効成分を作用機構により分類し、コード化したもの

3)但し、培土混和及び灌注は合計1回以内、育苗期の株元散布は1回以内、定植時の土壌混和は1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内

（注意事項）

- ・農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載されている使用基準、注意事項を必ず確認のうえ使用する。